

十文字学園女子大学人間生活学部紀要第1巻 2003年

育児期にある親の学びの場の創造 ——地域子育てネットワークによるワークショップ開発——

Creation of Learning Place for Parents in Childcare Stage
Development Workshop Concept through the Community
Childcare Network

坂本純子 (NPO 法人新座子育てネットワーク)

Junko SAKAMOTO

赤井美智子 (十文字学園女子大学)

Michiko AKAI

I. はじめに

平成14年度の合計特殊出生率が1.32と発表された今年(平成15年)7月、「次世代育成支援対策推進法」および「児童福祉法改正法」が成立した。

戦後の合計特殊出生率の最低記録だった昭和41年(丙午の年)の合計特殊出生率の1.58を下回った「1.57ショック」が日本中を駆け巡ったのが平成2年であり、その後、日本の合計特殊出生率の下降は続いている。厚生労働省は今年、現在のペースで出生率が下がり続けると、日本の総人口は平成18年をピークに減少に転じ、2050年には現在の1億2,693万人が1億59万人となり、21世紀には半減するという試算を発表した。

急激な少子化と高齢化の影響は、人口の減少というインパクトを以って将来の日本社会に様々な影響を与えることが既に予測されている。人口構成の歪みから社会保障制度も改革を余儀なくされ、地域や家族の変容、子育て・子育てへの様々な影響も指摘されている。

現在、日本がたどりつつある少子化は、単に子どもの数が減ることにとどまらない様々な現象を社会に引き起こし、未来を担う次世代に重くのしかかりつつある。こうした現状を認識しながらも、新たな命の授かりを喜び、健やかに育み、次の時代へとつないでいく営みについて、様々な視点から多角的に考察されることが、今まさに日本社会に求められている。

II. 目的と方法

“少子化スパイラル”とでも表現したい、少子化が引き金となって起こる様々な問題、その

キーワード：親子同室制、子育てサロン、子育てサポート、次世代育成、当事者性

現象の一部は既に深刻な問題として日本の育児の現場、ことに子育て中の若い家族の間で顕在化している。そのひとつが、親として育つための体験や学び合いの消失による「育児力の低下」や「子育てに関する不安や悩みの増加」である。

都市化・核家族化・少子化が本格化した高度経済成長期以降に生まれた世代が親となり、子育て世代の中心となる中で、育児に戸惑い、子育てに不安や悩みを抱える若い親は増加傾向にあり、「子育てが困難な時代」といわれる状況に陥っている。

かつて人々は、特別な教育を受けなくても、家族や親戚、隣近所の親たちの子育てを見習い、手伝いながら、親になるまでの人生の間で、育児につながる体験や親になるための心の成長を、日々の暮らしの中で遂げてきた。しかし今日の私たちの生活の中では、それまで人々が無意識に獲得してきた「子ども理解」や「関わり方」「育児の仕方」、そして「親としての自覚」といった意識の変容までもが、自然には行われにくい状況が広がってきているのだ。いつの間にか消失してしまった親になるための多様な学習や体験、意識の成長といったものを、現代にふさわしい形で創造することは、「子育てが困難な時代」を克服する重要なポイントである。

本稿では、筆者も加わり活動する埼玉県の新座子育てネットワーク¹の取り組みを具体例とし、現代の若い親たちの育児力の低下の背景にある、親として育つための場や機会を取り戻すための「育児期にある親の学びの場の創造」について、実践法と観察法に基づいて分析し、考察することを目的とする。

Ⅲ. 結果と考察

1 子育てネットワークの誕生

1. 埼玉県新座市の状況

埼玉県の南部に位置する人口約15万人の新座市は、東京のベッドタウンとして宅地化が進む郊外。市民の平均年齢は40.3歳で、毎年約1,400人の子どもが誕生し、6歳未満の子どもを育てる核家族世帯が、全国の他の自治体と比べると高い水準にある（平成15年新座市発表数値）といった地域特徴を備えている。

新座子育てネットワークが発足した平成11年当時、主に専業主婦で家庭において未就園児を育児する親への新座市の子育て支援策は、まだまだ手つかずの状態にあった。保育園で地域子育て支援に取り組む園は民営の1ヶ所のみ、子育て支援センターも0ヶ所（平成15年に1ヶ所目が開設）、ファミリーサポートセンターも設置されていない状況であり、市子育て支援課の施策はもっぱら働く親を主な対象とした保育所政策とケアを必要とする子育て支援が中心であった。

一方、社会教育行政においては、市内8ヶ所（当時）の社会教育施設で、通称「3歳児学級」と呼ばれる保育付の家庭教育講座がそれぞれ年1講座開設されていた。平日の午前中開催されるこの学級への参加者は主に専業主婦であり、教育行政がやや先行する形で、家庭で育児する親向けの事業がわずかながら実施されている状況にあった。

2. 課題共有の場としての「子育てサークルサミット」

このような地域特性を持つ埼玉県新座市で、平成11年9月、子育ての当事者が中心とな

り、子育て支援関係者や保健士などの専門職もネットワークの担い手となる形で、新座子育てネットワークは発足した。その後、地元の教育行政・福祉行政との協働や大学との連携、隣接市の子育てネットワークなどとの交流を図りながら活動を展開し、本年（平成 15 年）NPO 法人化を果たした。

新座子育てネットワーク発足の直接的なきっかけは、平成 11 年 5 月に社会教育施設で開催された「子育てサークルサミット²」である。この事業を通して新座子育てネットワークが生み出されるプロセスにまず着目したい。

子育てサークルサミットは、子育ての当事者やサークル・団体関係者や保健士などが参加し、3 回に渡り連続して開催された。その中で参加者たちは、それぞれの子育てや活動を交流させながら、新座市における子育ての課題に気づき、次の 7 項目の共有すべき課題を導き出してきた。

1. 子育てサークルの情報集約と提供が行われていない。
2. 子育てサークルの発足支援はあるが活動支援がない。
3. 子育てサークルの運営にまつわる課題解決が困難な状況がある。
4. 密室育児から母子を解放するための居場所作りの必要性。
5. 地域の母子の交流と子育て仲間作りの機会の不足。
6. 地域の子育て環境を母親自らが向上させる場の不足。
7. ネットワーク化が進んでいる県内先進地域との交流不足。

3. 個から社会へ、当事者から運動体へ

子育てサークルサミットで着眼したいのは、子育ての当事者・関係者が、自らの子育てや活動を通して切実に感じている課題を、支援者や専門家も座する議論のテーブルに載せ、地域の課題として捕らえた点である。

子育ての問題、ことに乳幼児期の課題の多くが、これまでは家庭や親や子といった個人の問題として取り扱われる傾向が強く、地域や社会に共通した課題であっても、家庭を超えた枠組みで共有されることは極めて稀であった。そのために、社会的な解決の道筋を探る以前のところで、親自身の未熟さや家族固有の問題として扱われることが多く、常に課題は当事者の周辺を堂々巡りしてきたのだ。課題に向かう時間経過とそれに伴う子どもの成長や周辺環境の変化とともに、新たな課題が親の前に出現し、当事者の意識もそれまでの課題の解決策を見る前に新たな課題へと関心が移行するということが繰り返されてきたのではないだろうか。その結果、社会的な取り組みによって解決の余地のある課題までもが地域や社会の中で棚上げされ、結果的に社会における子育て支援の環境改善がなかなか進まないといった状況が続いてきた。

新座子育てネットワークの発足場面における子育てサークルサミットでは、「個人から集団へ」「家庭から地域社会へ」という課題を捉える「枠組み」が変化を遂げ、「主体」としての親自身が変容を示し、地域社会で子育ての課題が共有される発展を示している。それと同時に、課題を巡り親と家庭の周辺で堂々巡りしていた解決に向けた取り組みの軌道が「社会化」し、新たな次元での軌道を描き出したと見ることができる。

一連の流れは、子育ての「当事者」が子育ての問題を考える「学習主体」となり、次に子育てネットワークの「活動主体」へと転じ、個々の子育てを変化させ、家族そして地域の子育ての変容を促し子育ての社会化を進める「運動体」への発展とも捕らえられ、「学習活動を通じた課題解決」という社会教育・生涯学習の典型を描いてもある。

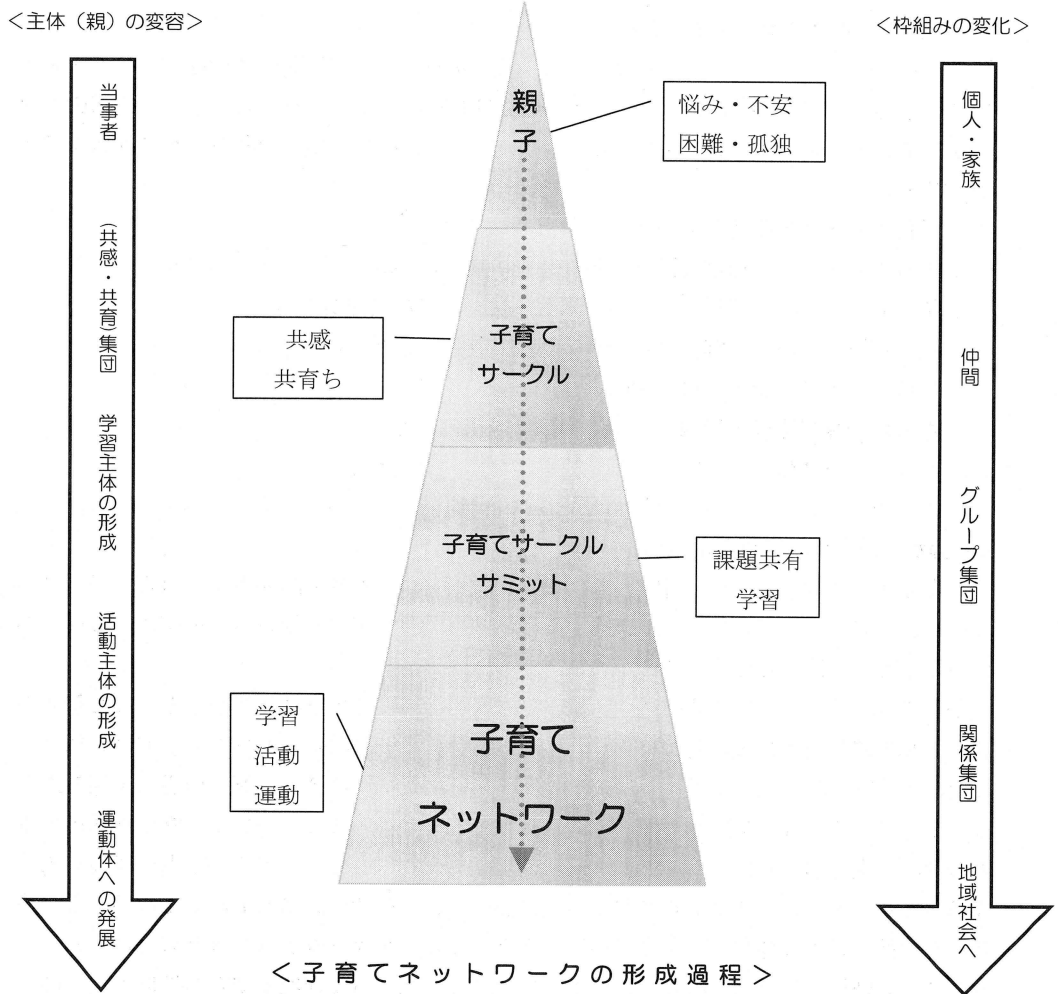


図1 子育てネットワークの形成と学習による「主体」の変容と「枠組み」の変化

2 親たちが創造した育兒期の新たな学習の場

1. 子育てサロン型学習への政府の注目

子育てサロンは、「ドロップ・イン³」や「つどいの広場⁴」といった名称で、近年、国や行政の支援を受けて、公民館などの社会教育施設や子育て支援センター、児童館、男女共同参画センターといった施設で広がりを見せている、乳幼児期の親子の交流・相談・学習のため事業の一形態である。

平成13年9月から15年3月にかけて文部科学省生涯学習政策局が設けた河合隼雄氏を座長（のち大日向雅美氏）とし筆者も加わった「今後の家庭教育支援の充実についての懇談会⁵」では、公民館をはじめとする地域の社会教育施設で、主に市民グループによって行われ始めていた子育てサロンにいち早く着目しており、平成14年7月にまとめられた報告書「3.今後の家庭教育支援の充実のための基本的な方策」の「⑥『子育てサロン』型学習形態の展開への支援」で次のように触れている。

「子どもが0歳から1歳ごろの子育てが最も孤独でつらいという人が多いので、そうした人が極身近に人とふれ合ったり、学んだりできる場、出かけられる場が求められています。

近年、各地で、そうした親のニーズに応えるため、子どもと手遊びなどしながら、同じような年齢の子どもをもつ親や先輩の親と話ができる場としての『子育てサロン』や『子育て広場』が公民館などの公共施設を中心に設けられています。こうした『子育てサロン』等には、従来行われていた家庭教育学級のような学習機会を求める親に限らず、多様なニーズや価値観を持った親が来ています。しかしながら、こうした学習形態についての社会教育関係者の理解がまだ十分でないことが指摘されています。

今後、社会教育関係者がこうした学習形態に対する理解を深め、『子育てサロン』等が全国各地に設置されるよう支援していくことを期待します。」

文部科学省の家庭教育分野で、子育てサロンに対するこのような認識がなされる一方、厚生労働省でも同様の事業の有効性に着目し、平成14年度より「つどいの広場」事業が創設されている。平成14年度には全国60ヶ所、15年度は85ヶ所に補助を行っている。

新座子育てネットワークでは、子育てサークルサミットで上げられた子育てネットワークの必要性の7つの課題のうち、「4.密室育児から母子を解放するための居場所作りの必要性。5.地域の母子の交流と子育て仲間作りの機会の不足。」に対応する活動として、発足当初の平成11年9月より子育てサロンを基幹事業として展開している。政府の着目以前に、地域で子育てする当事者の視点により、当事者・支援者たちの課題共有を通じた学び合いの中から独自に創造された点に着目したい。

2. 子育て当事者が創造した、出会いと学びの場

政府レベルでは平成13年ごろから子育てサロン型の学習への注目が始まっていたわけだが、新座子育てネットワークの子育てサロンの開設は、政府のこうした動き以前の平成11

年に既に出現している。新座における子育てサロンの開設もネットワークの誕生と同じように、子育てしている当事者（ネットワークのメンバー）たちが内包していた課題や自らの子育てを通して感じていた思いが、子育てサロンという新しい場を生み出す直接的な要因となっていたのである（図2）。

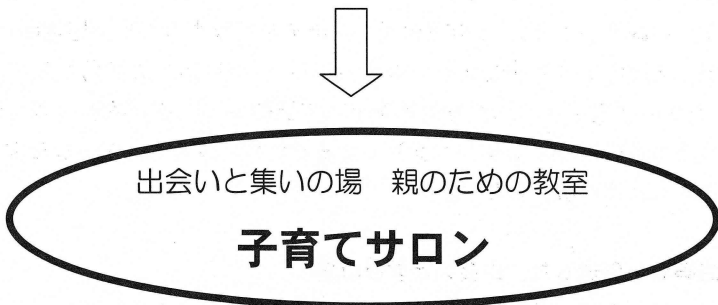
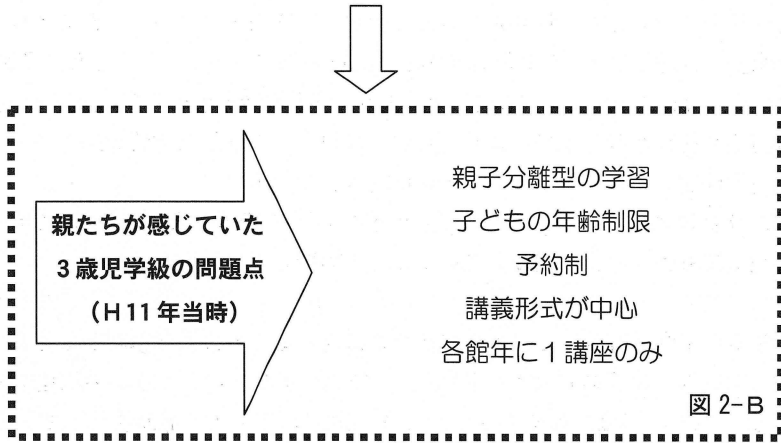
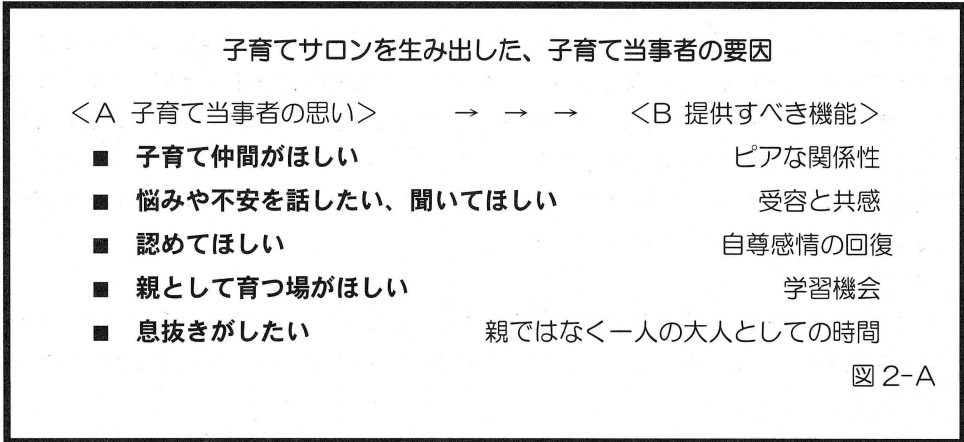


図2 子育ての当事者による子育てサロンの創造過程

子育てネットワークの活動主体である子育ての当事者がその思い（図2-A）を、ミーティングを通して重ね合う中で、当時、新座の社会教育施設で行われていた3歳児学級における子育ての当事者側から見た課題（図2-B）が上げられていった。それに加え、先駆的地域で生まれ始めていた子育て支援センターや子育てサロンに関する間接情報なども材料に、活動拠点も事業予算もない状況の中で、子育て中の親子の居場所として自分たちが作れるものはどんなものなのだろう、と知恵を出し合うことで生まれたのが新座の子育てサロンである。そこには専門家の助言もなければ、海外の先駆的情報も存在しておらず、まさに子育ての主体が課題を共有し、限られた情報を頼りに思考を深め創造した、地域の親子の出会いと集いの場であり、子育ての先輩から育児を学ぶ、親のための教室でもあったのだ。

地域で子育てする親子が三々五々と集まり、公民館の一室で出会い集う。ボランティアの少し先輩の地域の親にサポートされながら、子育ての日常を交差させ、子どもへの関わり方やさり気ない育児のヒントを得ながら、乳幼児への理解を深め、親としての意識を育て、地域の子育て仲間をつくっていく。子育てサロンは、一見、何気ない日常の延長のようなシンプルな事業だがそこには、出会いと仲間作り、そして交流を通じた学習の仕組みが確かにデザインされているのである。

3. 育児期の親が求める学習環境

新座の子育てサロンはまず、「母と子の手遊び講習会」という形で出現を見る。その開催を知らせるチラシには、

「子どもといっしょに楽しむ手遊び、お母さんはいくつ知っていますか？手遊びにも流行があるって、ご存知でしたか？（中略）みんなでわいわい、覚えましょう。さあ、歌って、遊んで、フリートークで情報交換、地域の子育て仲間と楽しみましょう。」と記されている。

会場となっているのは社会教育施設（公民館）の一室で、平日午前10時～11時30分の1時間半、参加対象は「乳幼児とその親」とあり年齢条件は記していない。親子いっしょでの参加で、事前予約は不要で当日受付、参加費は無料である。

内容の項目には、「手遊び講習とフリートーク（子育て交流）」と書かれ、地域の親子と交流できることも記されている。

子育ての当事者たちのニーズに応える事業スタイルが好評で、市内の社会教育施設をキャラバンする形で開催した「母と子の手遊び講習会」はどれも盛況で、程なくこの講習会は、現在の「子育てサロン」として結実していった。

現在使用されている子育てサロンのチラシの事業内容の紹介には、
「子育ての悩みは、私だけ？おしゃべりの中から、子育てのヒントやとっておきの情報が見つかるはず。お友達といっしょにリフレッシュしましょ!!」
と記されている。

新座子育てネットワークの子育てサロンは、前項で示した「子育てサロンを生み出した、子育て当事者の要因（図2-A）」に応えることがまず目指されたわけだが、その事業形態の中から、現代の育児期にある親が心地よく学ぶための学習環境を作るために配慮すべきポイ

ントのいくつかが発見できる。

1. 社会教育施設という「場の安心感」
2. 乳幼児と親を参加対象とする「同質性の保障」
3. 交流を通じた仲間との「出会いとリフレッシュの場」
4. ファシリテーター、コーディネーター、ロールモデルとしての「子育てサポーターの存在」
5. 負担やプレッシャーを感じさせない「参加型学習」

子育てサロンの展開の中で見出されたこれら5つのポイントは、新座子育てネットワークがサロン以外の事業を企画する際にも留意する大きな柱となっている。子育ての当事者自らが生み出した、現代の育児期の親が求める学習環境をデザインする際に留意すべき5つのポイントとして提案したい。

3 開発したワークショップの実践と特性

育児期にある親が参加者となり、グループにおける実体験を通して課題についての学びを深める活動として開発されたワークショップは、子育て当事者が創造した新たな学びの場の一つになっている。このような育児期にある親のためのワークショップは彩の国ジェンダー・プロジェクト2002（埼玉県内のいくつかの子育て関係のネットワークに参加しているメンバーによって構成されているプロジェクトチーム）の中にある筆者等が参加するワークショップ開発チームによって開発された。2003年には、既出のプロジェクト2002は、「ワークショップ・マニュアル『子育てセンスを磨こう！一個性、再発見一』」を発行し、現在は各地の子育てサロンや公民館などのそれぞれの場でワークショップの特色ある実践が展開されている。

このようなワークショップの研究課題は、2001年の彩の国ジェンダー・プロジェクト2001で着手したパネルシアター「私の得意なこと見せてあげる」（平成13年度文部科学省委託事業）の開発過程で生まれてきた。そこで、2002年には、彩の国ジェンダー・プロジェクト2002は同省の「生涯にわたる男女共同参画学習促進事業」に応募し、ワークショップ開発への助成を受けることにより、開発チームによる活動は始まったのである。

ここでは、開発されたワークショップの枠組み、特性、実践結果に関する研究について述べる。

1. ワークショップの枠組み

(1) ワークショップにおける学習のねらい

ワークショップの開発チームは、育児期にある親が子どもと共に集団活動に参加し、相互に育ち合えるような実体験を通して、子育てや子ども理解、自己理解について学ぶことをワークショップにおける学習のねらいとした。そのようなねらいに即したワークショップの内容と構造を開発するために、専門家を交えての学習会や話し合いを重ね、2.で述べた育児期の親が求める学習環境の5つのポイントを踏まえたワークショップの大枠を構築し、具体的なテーマ（「子育てセンスを磨こう！一個性再発見一」）に即した内容と構造のあるワークショップを、試験的モデルをプレワークショップとして実践しながら具体的

に探求した。

(2) テーマに即した学習内容のポイント

参加者である育兒中の親が、子どもと共に安心して参加でき、親子で楽しめ、しかも男女共同参画時代の子育てについての実体験による気づきや学びを得られることを学習のねらいとし、参加者の親にとっての学習のポイントを次のように設定した。

- ・同じような保育状況にある親子同士が集い、仲間同士としての共感性がある学習環境（ワークショップ）での学習を実体験する。
- ・子どもはみんなひとり一人違っている個性的な存在であり、どの子どもにもさまざまな個性と可能性があることを理解する。
- ・親自身が無自覚に持っているバイアスが、知らず知らずのうちに、子どもの個性や可能性を狭めることにならないように、自分の持っているバイアスについて自覚的になる。
- ・多様な他者の視点やかかわり方に接することが、子どもの可能性を広げ子どもの育ちを豊かにし、親自身の視点やかかわり方の幅をも広げる刺激になり、子育てをより豊かにすることを実感する。
- ・男女共同参画時代の子育てには、性別にこだわらずにひとりひとりが有するその子らしさを大切に、それぞれの個性を十分に発揮しながら子どもたちが育ち合えるように応援することが親や社会の役割であることを理解する。

(3) 活動の内容構成

具体的な内容について述べる前に、活動を構成する人と物に関する枠組みについて解説する。

<活動会場>

20人以上の親子やスタッフが参加する集団活動を展開しやすい場所としては、公民館などの社会教育施設や女性センター、児童館が一般的であろう。参加者の人数によるが、20人以上が集団活動をしやすい部屋の広さとしては、小学校の教室の広さ以上であることが目安となる。

幼児と共に活動するこのワークショップでは、乳児を抱いたり出産をひかえている親もいるので、活動のしやすさや安全の観点から、参加者用の椅子やテーブルを特に必要とせず、車座に自由な姿勢で座っていても展開できる内容になっている。土足で利用する部屋よりも、カーペットやフローリングなどの床になっている部屋に、靴を脱いで入室し、利用できる（床にごさや布を敷いて、座ることもある）床の部屋が活動しやすいであろう。

<ワークショップ実施者と参加対象者>

・実施者

地域の子育て支援・家庭教育支援に取り組んでいる子育てネットワークや子育て支援グループがスタッフとなり、実施できるワークショップとして開発した。

・実施に必要なスタッフ人数（4名）

ファシリテーター（ワークショップの進行役）：1名

パネルシアター演者：2名（保育兼務）

保育専任スタッフ：1名

・参加対象者

3～5歳の幼児とその親むけの内容となっており、参加人数の目安は12～15組の親子（ワークショップを実施するスタッフチームのキャパシティに合わせて調整する）

<活動の内容構成>

実施時間…60分（母子が分化して展開する活動は30分間）

オリエンテーション → パネルシアターの鑑賞 → 親グループと子どもグループに分化する活動 → 同室内で親グループ（ワークショップ）と子どもグループ（自由遊び）で別々の活動を展開する → 親グループと子どもグループが合流する活動 → 親子合同活動（歌遊び）

2. 活動の展開に対応したねらいと内容の概要

ワークショップ開発チームは、未完成のワークショップを「プレワークショップ」と称して実験的に実践しながら、参加者の感想や意見を検討し、内容を改善していく活動を積み重ねることにより、目的に合ったワークショップの開発を進めた。

ここでは、このワークショップの開発・実践にスタッフとしてかかわった筆者の立場から、主要な活動の展開段階に焦点を絞り、そのねらいと内容の概要を述べる。

<オリエンテーション>

親子での外出に伴いやすいいろいろな困難を乗り越えて会場に到着した親子を温かく迎え、慣れない会場や受付などにとまどっている親子の緊張をほぐし、安心して参加できるように、活動の始まる前のオリエンテーション活動を、参加者にとって大切なウォーミング・アップ段階として位置づけ、次のようなきめの細かな対応を心がける。

①歓迎のメッセージを伝え、②スタッフの自己紹介をし、③これからの活動の大まかな流れや親子同室であるが、途中で親子が分化して活動する場面があることをあらかじめ説明する。

集団活動への参加申し込みをしても、幼い子どもを育児中の親にとっては、思いがけない子どもの体調の変化やいろいろなハプニングが伴って出席できなくなったり遅刻する事態になりがちであることを十分に理解しているスタッフチームは、常にやむをえず遅れて到着した参加者への温かいサポートとフォローの役割を担えるように連携し合っている。

<パネルシアターを親子一緒に楽しむ活動>

パネルシアター「わたしの得意なこと見せてあげる」（彩の国ジェンダー・プロジェクト2001による開発）は、誰もが想像しやすい得意なことを持つ動物たちがまず登場し、その後、他の仲間とは違う得意なことをもつ動物たちが登場する構成になっているお話である。それぞれの動物に多様な個性があることに気づき、それぞれの得意な事を歌う（「山の音楽家」のメロディーで）場面が繰り返され、動物の種類が変わりながら展開する。親しみやす

いメロディーでいくつかの異なる種類の動物がグループで出てきて異なる個性を發揮しながら歌うそれぞれの場面には、個性に優劣がないこと、個性を大切にすること・されることは当然のことなのだというメッセージがこめられている。

このパネルシアターは、誰でも共通なところと異なる独自性を持っていること、それぞれの個性が多様であることの楽しさと豊かさ、それぞれの個性を認め合うことの心地よさ、楽しさを少しでも観客に体験してもらいたいという願いが込められている。登場動物には、変身やおもしろい動きによる個性を發揮できるようなアイデアに富む仕掛けが組み込まれており、親しみやすい歌の繰り返しもあるため、親子が共に楽しんで参加しやすい構成になっている。仕掛けのある動物パネルを制作することが、時間的に無理である場合は、仕掛けなしの動物パネルを使用しても、十分に親子で楽しめる構成である。

<親グループと子どもグループはそれぞれの場所へ移動する活動>

パネルシアターを見終わったら、新しいスペースで、新しい人に出会って、いろいろな人と一緒に、遊んだり、話し合うような何時もとは違う新しい関係体験への期待が成立することをねらう。

幼い子どもが、親の側から離れて同じような年齢の子どもたち集団の遊ぶスペースへ参入することが、子どもたちにとって無理なく自発的な過程を経て実現できるように、たとえ短時間の母子が分化する移動活動であっても、スタッフはワークショップの展開過程の中での独立した大切な活動段階として位置づけて、個々の子どもに応じたかかわりを心がける。

親のそばから子どもが離れたくない時は、無理やり子どものスペースへ誘うことをせずに、親が子どもスペースにできるだけ近い位置に座ることをスタッフは提案したりして、子どもが親のそばで遊びながら、子どもスペースの遊びも観られるようにする。

<子どもグループの活動>

子どものスペースには、パネルシアターの内容に関連したおもちゃや素材、興味を惹きつけやすい玩具などを用意してあり、親の姿が見える距離にあるスペースで、新しい人（スタッフ、子どもたち）と出会って、自由に遊ぶような新しい体験の広がりをねらう。

親子が分化して展開する活動を設定しているが、親の側でしばらく遊んでいた子どもには、おもちゃを運んであげたり、親の側から子どものスペースの遊びが見やすくなるようにする。スタッフは親の活動スペースにちょっと近づいてみたくなった子どもには一緒に出かけたたり、子どもどうしの関係をつなぐ役割を担ったりする。

子どもの主体的な選択を尊重した、穏やかで細やかな子どもと親へのはたらきかけが媒介となり、時間の経過と共に、子どもの活動範囲が広がり、親の側にいた子どもが子どもスペースへ移動したり、子どもスペースにいた子どもがしばらく離れていた親のところへ自分の描いた絵を見せに行ったりという、二つのグループが分化しながらも、時には両者の間を子どもが行き来することが可能な特色ある集団運営が展開する。

<親グループの活動>

親は子どもグループと隣接するスペースで、「子育てセンスを磨こう —個性再発見—」というテーマのグループワーク（ねらいについては1.で既述）に参加するが、その活動内容の概略を段階に分けて述べる。

① グループ分け

参加者全員が丸く並び、五十音順にすばやく並び直すゲームを行い、4, 5人からなる小さなグループを三つぐらい作る活動をゲーム感覚で行い、その後、グループごとに簡単な自己紹介を行う。

② テーマに沿って各自がワークシートへ書き入れた後に、グループで話し合う。

- a. ワークシート（「かんしんシート」）が配布され、「自分の子どもの“かんしん”するところ」を考えて、その中の2つをシートに書き入れる活動を行う。スタッフは、「紙とクレヨンがあれば、1時間でも2時間でも絵を描いています。そんな我が子の集中力に感心します。」などという身近な例をいくつか挙げて、メンバーが思いつきやすくする。
- b. シートに書き入れた内容を順に各自がグループメンバーに説明し、それについての意見をメンバーから言ってもらい課題活動をする。その際、スタッフより、「ただし意見は、『肯定的』『発展的』『子どもの可能性を感じさせる』ようなメッセージであるようにと考えながら、発言して下さい」という課題枠が示される。
- c. 全てのグループでの話し合いが終了したら、このような活動をして初めての感想をグループで話し合うシェアリングをする。

③ ワークシートに、グループ討議を通じて感じたことを、「子どもへのメッセージ」にして子どもへ伝えるつもりで書き入れる自己活動をする。その後、各グループごとに、メッセージを報告し、「子どもの個性に気づき、それを育てる親の子育てセンスを磨こう」というテーマを意識しながら、話し合うシェアリングを行う。

④ 参加者メンバー全員が集まり、各グループの代表が自分のグループの活動における話し合いの概略について発表することで集団全体が他グループの活動成果を共有できるようにする。

⑤ 親グループのスタッフが④での発表内容を受けて、活動のまとめを行う

複数のグループにおける発表内容の共通性や独自性にふれながら、親グループの活動成果をまとめる役割をスタッフが担う。その際に、発表内容に対応させながら下記のポイントの押さえを必ず行うようにする。

<ポイント>

- ・子どもの個性を感じ、気づき、それを大切に育てるためには、親の側にも豊かな感受性が求められる。
- ・お兄ちゃんだから、妹なのだからと言った兄弟姉妹の序列や、男の子だからとか、女の子なんだから、といった性別の鑄型、お父さんがこうだから、お母さんがこうだからといった決めつけ、一方的な期待や思い込みに親がとらわれていると、子どもの個性を発見する親の感性はにぶりがちになる。
- ・世界にたった一つのその子らしさを大切に、親子で、すてきに育ち合っていきましょう。
(彩の国ジェンダー・プロジェクト 2002 制作、発行「ワークショップ・マニュアル『子育てセンスを磨こう！一個性、再発見』」2003 年)

次に、活動後、家庭にもどってから、ワークショップでの学びが日常生活にも継続して生かされることをねらって、スタッフは「かんしんシート」の活用法について下記のような提案をする。

- ・持ち帰ったシートを、子どもに分かりやすい言葉にして読み聞かせながら、親グループで子どもの素敵などころを、みんなに褒めてもらったことも話して聞かせてあげる。
- ・シートを冷蔵庫のドアなどの目に付くところに貼っておく。（「時々、それを読み返してみるのもいいですね。」）

最後に、帰宅後も継続した学習を深められるように、子どもの個性を大切に伸ばすための、ジェンダーにとらわれないで一人一人の個性を大切に育てる子育てを呼びかける内容の「ジェンダーって？」というリーフレット（彩の国ジェンダー・プロジェクト 2001 制作）を「自宅でゆっくり読んでみてください」と言って配る。

<親グループと子どもグループが合流した親子合同活動>

親グループは子どもグループのスペースに移動し、親子でペアになって、大きな輪を作り、パネルシアターで歌った「山の音楽家」をもう一度みんなで歌う。2 番目からは、最初のセッションで発言の機会がなかった子どもにできるだけ焦点をあてるようにしながら、何人かの子どもに得意なことを質問し、その子どもたちの名前と得意なことを織り込んだ替え歌をみんなで歌って、ワークショップを終了する。

3. ワークショップの結果についての分析と考察

開発したワークショップの実践結果については、参加者の中で、自分のワークシートのコピーを資料として提供することに同意した人のワークシートや感想シートを分析対象として記述内容の分析法と、観察法（ワークショップをビデオでも記録）、実践スタッフによる参加観察記録によって得られた資料をもとに分析と考察を行う。

実践会場

1. 志木市中央公民館 （2003 年 2 月 6 日、親子 13 組参加）
2. 新座ホットプラザ （2003 年 3 月 1 日、親子 6 組参加）
3. 東朝霞公民館 （2003 年 6 月 30 日、親子 8 組参加）
4. 十文字学園女子大学 （同 上 7 月 1 日、親子 8 組参加）
5. 東北コミュニティセンター （2003 年 7 月 3 日、親子 15 組参加）

参加親子数 合計 50 組（2、3 歳児を中心として 1 歳 9 ヶ月から 4 歳までの幼児が参加）

実践スタッフチームは、彩の国ジェンダー・プロジェクト 2002 への参加者の中から生まれた筆者を含むワークショップ開発チームのメンバーが中心となり、会場ごとに編成した。

(1) シートにおける記述内容についての内容分析と考察

時間延長による不都合が起きやすい育児中の親子の活動では、スタッフには予定時間どおりに活動を終わられるように細かい配慮をすることが必要とされる。

今回のワークショップでも、終了後に、自分のシートがコピー後に返却されるまで、気軽に待ってられない参加者がいることを予想して、帰りがけに時間的な都合のつく人の

シートだけをコピーさせてもらうようにしたため、会場ごとに集まったコピーシートの数や回収率は異なっている。(4と5の会場では、感想シートは使用しなかった)

このようにして集まった感想シートやかんしんシートの記述内容に対して、以下の3つのことがらについて、記述内容の類的把握による内容分析を行った。

① ワークショップ体験についての感想シートにおける内容分析

〈方法〉参加者から提供された感想シート 24 枚に対して、各人ごとに記述内容を複数の小項目に分化させる作業を行った。それから、小項目間で内容が共通であったり、類似する項目同士をいくつかのグループに分け、それぞれのグループには小項目を包含するような意味を有する大項目を設定した。それらの作業から得られた5つの大項目を類型として、記述内容の分類を行った結果は表xのようにまとめられた。さらに、各類型ごとにその類型にあてはまる内容を記述した親の人数は全人数の何%かを計算し、親の感想内容の全体的な分布傾向を把握した。

表x ワークショップの感想についての内容分析

類型	①これまでの子どもへのかかわり方への振り返り	②ワークショップでの気づきと学び	③学びを未来の生活へ生かそうとする意欲	④ワークショップの運営の仕方への感心と感謝	⑤話し合いの楽しさや気分の変化
具 体 例	日々、追われていて、あらためて子どもの個性を見直すことがなかった	相手を褒めることは、自分にも気持ちがいいものだ	貼っておくこのシートを時々見て、今日のことを思い出すようにして子どもにかかわりたい	親にとっても、子どもにとっても楽しく過ごせる場だ。明るく分かちやすく進めたスタッフに感謝	子育てしている人たちとお話しして、気分が変わり、やる気が出てきた
	必死で子育てをしていると、その大切さ、子どものよいところを見失ってしまいがちだった	皆にいろいろ見方を変えて言ってもらって、子どもの良いところ、個性に気づけた	これからは、ありのままの子どもと自分をポジティブにとらえたい。それには、母親がいきいきしていないと	無理だとは思わなくても、もっとグループトークで長くやりたかった。ありがとう	明るく、楽しく話せる場だった。もっとこういう会が多かったらなあ。また、出席したいです。
時相	過去→現在	現在	現在→未来	現在	現在
割合	42% (10人)	88% (21人)	67% (16人)	50% (12人)	42% (10人)

- ・記述内容には、「これまでは、…だった」、「ここで、楽しさを感じている」、「これからは、…にしたい」というように、一人の人が書くシートの短い文章の中に、時相(過去、現在、未来)を変化させながらの記述が多い。42%の人が過去へのふりかえりから記述を始めていた。過去のふりかえりや、今、ここでの学びから、それらを未来に生かそう、これからの日常生活の発展につなげようという未来志向的姿勢も目立ってとらえられた。(類型③ 67%)

- ・類型②に関して88% (21人) の人が記述している事実からは、多くの人が何らかの学びを得ていることが分かる。表の具体例に書かれているように、分かっているけれど実行しないままでいた子どもへのかかわり方の留意点を改めて再認識したり、日々の生活に追われて忘れていた、“子どものよいところ探し” にみんなで取り組むことで、「親が困っているところの裏には、子どもに伸びている面もある」ことへの発見・感想がよく書かれていたが、そのような学びの深化は、未来への新たな姿勢づくりへと進むことが多くの記述の流れから読み取れた。
- ・ワークショップそのものの運営の枠組みについての感想は、全体の半分の人が記述している。(類型④ 50%)。その内容の全ては、肯定的なものであり、親子同室で親子が分化したり合同したりする活動が自然に展開し、子どもにとっても、親にとっても楽しく活動できる枠組みの良さや、スタッフの分かりやすく温かい対応への感謝などが記述されていた。母親ボランティアであるスタッフチームによって展開する親グループと子どもグループが無理なく分化したり合同したりする活動への参加体験は、かなり新鮮で興味深い内容であったであろう。数人の参加者からは「子どもとの関係が無理だとは思いますが、もっと長く話し合いの時間をもちたかった」というような活動時間の延長を望む要望も記述されていた。
- ・類型⑤に属する記述は42%の人によってなされ、その中でよく用いられる語句は、「いろいろな人と話すことは楽しい」「気分が変わる (リフレッシュする)」、「こういう会があったらまた出たい」であった。ワークショップで、同じような育兒期の親や少し先輩のお母さんスタッフとかかわり合い、子どものようすが見える場でリラックスして小グループで話し合える機会を持てたことは、多くの一人で子育てに奮闘中の親にとっては、励みになったり、気分をリフレッシュさせて前向きに子育てに取り組む意欲を促進する効果をもたらすことが明らかになった。

② かんしんシートの“感心するところ”の記述内容の内容分析 (表 x x)

＜方法＞①と同じ類型把握による内容分析を行った。34人の参加者がシートに記述した子どもの“感心するところ”の内容は次のような関係学における人間の役割行為を把握する5つの「役割行為の類型」(関係学会編「関係学ハンドブック」関係学研究所1994)に基づいて分類した。

- ・自己身体的役割…眠ったり、食べたり、走ったりするような身体機能を持つ役割
- ・心理行為的役割…笑ったり、悲しんだり、意志を表現したり、自己の心理的動きを表出する役割
- ・人間関係的役割…人へ話しかけてはたらきかけたり、一緒に遊んだり、物のやりとりをしたりして、人とのかかわりに影響を与える役割
- ・場面構成的役割…人の生活する場において、空間的・物理的な位置関係や、物の構成により、人への活動に影響を与える役割
- ・社会地位的役割…社会集団における地位を表す役割。たとえば、保育士、母親の役割、など。

表 xx 感心するところについての内容分析

類型	①自己身体的役割	②心理行為的役割	③人間関係的役割	④場面構成的役割	⑤社会地位的役割
具体例	なんでも食べられる素晴らしい食欲	よく考えて、工作や絵に集中して、いろいろな物を作り出すところ	妹想いで、思いやりのあるところ		
	自分で朝起きられる	強い意志を持ち、それを主張できるところ	お手伝いをよくしてくれるところ		
割合	22% (16)	56%(41)	22% (16)	0%	0%

- ・幼い我子について“感心するところ”の記述内容を、役割行為の類型によって分類すると、心理行為的役割と人間関係的役割と自己身体的役割の三類型の中に、全てを当てはめられる内容であることが分かった。(場面構成的役割、社会地位的役割についてはゼロであった)
- ・スタッフは、例を紹介しながら、自分の子どもの“感心するところ”を考える時間を設け、「たくさん思い浮かんだかもしれませんが、その中から2つだけ、シートに記入してみましょう」と指示したが、実際のシートに書かれた“感心するところ”の数は、1つ(6人、18%)、ふたつ(17人、50%)、3つ(11人、32%)であり、平均は2.15であった。この数字からは、2つ位が親にとって無理なく思い浮かべられる数であり、スタッフの指示した数は適当であった考えられる。
- ・34人の参加者各人が一つあるいは複数の“感心するところ”を記述しているが、その総数は73になった。類型②の心理行為的役割に分類される感心内容が一番多く記述されており、それは全体記述総数の56%を占めている。次に多いのは類型③の人間関係的役割行為(22%)と自己身体的役割行為であり(22%)、この両者の割合は同じである。年齢の低い子どもに対して類型①の内容が記述されやすく、年齢の高い子どもに対しては、類型②や類型③に対応する複数の内容が記述される傾向にあり、そこには、発達と共に子どもの役割行為の幅が自己身体的役割行為以外へも広がることとの関連がとらえられる。
- ・類型①の具体例として、食欲旺盛なこと、自分で、朝、目覚めて起きられること、走りまわられる体力等が感心するところとして記述されているが、そこには、命の輝きに満ちて成長する子どもに対して、ありのままの「今、できていること」を肯定し、感心している暖かな親の視点を見ることができる。
- ・類型②に当てはめられた記述内容の項目は(総数41)、さらに5つの小類型で分類できるが、記述頻度の高かった上位3類型とその%は次のようになった。
 - a. 大好きなことや遊びに、長く集中できる力(50%)
 - b. 記憶力の良さ(12%)

c. 強い意志、強い自己主張（10%）

- このような記述内容の分布の仕方からは、日常生活の中で、子どもが子どもなりに、感じ、考え、行動している姿に感心する親の視点は、こどものありのままを肯定的に受容し、子どもの自己の育ちと個性を尊重しようという基盤的姿勢とつながっていることが推察される。

・かんしんシートの子どもへのメッセージにおける記述内容の内容分析

- ・<方法>①、②と同じ方法で、類型把握による内容分析を行った。（表 xxx）
- ・多くの親は複数のメッセージを記述していたが、34人のメッセージを各人ごとに記述内容別に項目で分化させてカウントした数の総数は60になった。内容が類型②（子どもへの要望・願い）に当てはまるものが、一番多くの親によって記述されており（68%、23人）、その内容のほとんどには、「好きなことをいっぱいしながら元気

表 xxx 子どもへのメッセージについての内容分析

類型	① 与えられていること	② 要望・願い	③ 感心していること	④ これから・未来への抱負
具体例	Aちゃんの明るさとやさしさに救われているの	やりたい気持ちを持ち続け、チャレンジして、お母さんの知らないことを教えてね	ガンコの理由が分かり、意思の強さに感心したよ	ちょっと違った視点で、あなたの良さを見つけていきたい
	いつも、助けてくれてありがとう、うれしいです	たくさん食べて、歌って、元気に育ってね	しっかり自分の気持ちを伝えられ、自分で自分のことをするいい子だね	もっと、外で遊べるようにしてあげよう。パンチングボールを買おうかな！
割合	24% (8人)	68% (23人)	41% (14人)	29% (10人)

におおきな一れ」、「名前のとおり、悠々自適に生きてくれ。男の子だから、いっぱい、いっぱいあそんじゃおー！大きく、大きく伸びて下さい。」等という調子で書かれており、ありのままの、今、現在の子どもの個性の発現、在りようを、“その子らしさ”として肯定し、おおらかに受容し、子どものその子らしさが伸びていくことを願う気持ちが込められていた。

- ・さらに、「車のことをこれからも教えてね」「…お母さんの知らないことを教えてね」「これからも、よろしくね」というような記述も4、5例あり、親が子どもに教える役割ばかりに固定することなく、親子の関係を平等にとらえ、子どもの内面を尊重しながら、子どもからも学ぼうとする柔軟な親の基本姿勢をそこに見ることができる。
- ・類型③全体の41%（14人）の親が「感心しているところ」に分類される内容の記述をしていた。ワークショップで気づかされたり、発見した子どものよいところや個性について、改めて理解を深めたり、感心できることが増えると、親は子どもへ伝えた

いという意欲が高まるのであろうか。たとえば、子どものがんこさに参っていた親にとっては、視点を変えてポジティブ面からとらえてみると、「自分なりの意見を主張できるとか、意志が強固だとも言えるのだ」ということを発見できたことを、早速、ワークショップへの参加の成果や喜びとして、メッセージにこめて、家族へ伝えたいくなるのであろう。

- このような小グループでの話し合い活動と記述内容や感想のシェアリングを媒介しながら、子どもの個性についての感じ方、考え方における視点の移動や多面的な把握を実体験する課題に集団で取り組む活動は、おしゃべりの楽しさだけではない、認識と行為において新鮮でインパクトのある学習体験となり、そこでの気づきや発見は、早速子どもに伝えたり、未来志向性を高める(類型④)方向への促進効果があることが明確になった。
- 類型①「子どもが与えてくれること」に当てはまる内容を参加者全体の24%(8人)の親が記述しており、そのような視点からもメッセージを書ける親の多さに驚かされた。そこには、子どもを、親から与えられ、教えられる一方の存在として一面的にとらえるのではなく、親も子どもから与えられ、教えられる関係にあるのだという、親子関係の相互性への基盤的認識の存在が示されている。そして、それらの記述には共通して、原始的ともいえる生命力に溢れる子どもへの畏敬や感謝の言葉がユーモアのある暖かい表現で添えられており、広い視野による親としての余裕が感じられた。
- 類型④の「未来にむけた抱負」には、より豊かな子どもの成長のために、ワークショップで学んだことをどのように生活にいかしていきたいか、子どもへのかかわり方をどのように変えたいかについての未来へのメッセージが当てはまっており、それは全体の42%になっている。語調は、「もっと、……こうしてあげよう」「これから……一緒にこうしようね」というように、具体的な未来に向けたプランをいきいきと語りかけるような記述が多い。そこには、グループでの話し合いやシートにメッセージなどを書き入れる活動体験は、そこでの学習と日常生活とをつなぐ役割を果たして、新たな取り組みへの意欲を促進する働きをしていると考えられる。

(2) 開発したワークショップの特性

参加者のワークシートについての分析結果と各種の観察結果について考察し、このワークショップの特性を二つの観点から述べる。

① 活動の枠組みによる構造的な機能特性

＜親子で同室内の空間を共有したり、分有したりする活動展開は親子の関係体験を拡大し、充実させる成果をもたらしている＞

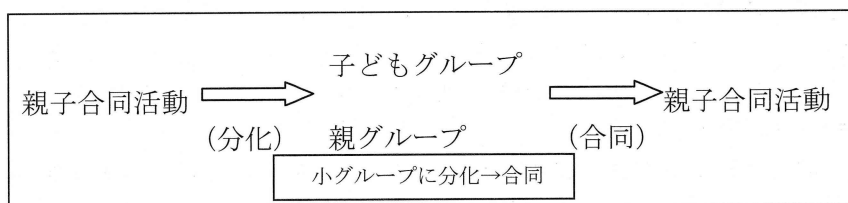
親子同室制の活動空間枠と、60分で終了する時間枠が設定されていることにより、幼い子どもと親は無理をせずに精神的に安定した状態で活動に参加でき、同室内で親グループと子どもグループに分化したり(30分間)、合同する活動においては、活発で相互的な活動が展開しやすくなっていた。このような変化のある活動によって、参加した親と子には、家庭では得られないような多様性と楽しさのある関係体験がもたらされた

ことになる。

<親グループ活動における活動単位の多様な変化による力動的な関係展開>

親グループの活動単位枠は、活動の展開段階によって変化するように設定されている。親グループ全員（10人以上）で話し合った後に、3つ位の小グループに更に分化した活動を展開し、再び合同して親グループ全員で話し合ったりするような変化によって、小グループ間関係が成立し、隣り合う小グループ同士が相互に刺激し合いながらそれぞれのグループ内の活動が活発化し、ワイワイとしたにぎやかな雰囲気における集団全体の凝集性が高まった。

子育て中の親にとって、このような自己と子どもが同時にそれぞれ異なる集団活動に、安心して深くかかわることで充実し、自己と人と課題とのかかわりが相互媒介的に発展するような関係力動体験は、得難いものであったはずである。4人前後の人数からなる小グループ活動により、自己が発言する機会もメンバーの話聞く機会も増え、小グループ内のメンバー同士の親密さと課題活動への意欲が大いに深まっていた。このような変化はスタッフチームによる親と子ども双方へのサポート体制が基盤として常に存在することによって、可能になっているのである。



<自己（参加者）が、人（メンバー、スタッフ）や物（課題、ワークシート）と相互にかかわる三者関係の構造における集団状況を基盤とする活動展開により、自己関係、人関係、物関係が相互媒介的に発展するような力動的な関係展開が促進され、多くの発展的な活動成果が産み出されている>

このワークショップには、「三者関係の原理」⁶に基づき、自己とメンバー以外に物（共通課題、ワークシート）が関係単位として加えられ、さまざまな三者関係が展開する状況が積極的に設定されていた。このような自己と人と物からなる三者関係や、自己とメンバーとスタッフからなる三者関係、自己とメンバーと課題からなる三者関係が複合する状況においては、かかわり合う三者間に多様な関係通路が成立し、それらの通路を生かした相互的なかかわり合いを意識的に促進する役割をスタッフが担った。このような状況構造によって、関係が力動的に展開し、自己活動だけでは生まれないようなさまざまな関係発展の成果が産み出され、それらをシェアリングの活動によって、メンバー同士で意識化し共有することができた。

主として、対人関係においてとらえる三者関係の発展状況の展開例としては、自己とスタッフとメンバーからなる三者関係の展開場面をあげることができる。この三者関係

においてスタッフはメンバーに課題を提起する方向性機能を担っているが、活動の展開過程ではグループの自発性にできるだけまかせるような外接的なかわり方を心がけていた。このようなスタッフの媒介、援助機能があることで、それぞれの小グループは、自分たちの自発性や個性を大いに発揮し、集中して課題に取り組んでいた。

また、主として、物関係媒介による三者関係の発展状況は、自己と物（課題、パネルシアター、ワークシート）と人（子ども、メンバー、スタッフ）からなる三者関係において多様に展開していた。

このワークショップには、オリジナルに開発された物（パネルシアター、ワークシート）と自己とメンバーからなる三者関係、課題と自己とメンバーからなる三者関係、自己とワークシートと帰宅後の自己課題における三者関係、自己とスタッフと課題からなる三者関係、パネルシアターと自己と子どもからなる三者関係等が重層的に展開、発展する関係状況があり、メンバーがそこでの実体験の楽しさ、喜び、学びを豊かに実感しやすい構造になっている。

このような親子共に参加でき、活動での学びが日常生活へつながることを意図したワークショップは盛りだくさんな変化に富む課題状況の構造であるにもかかわらず、実践後の感想シートには、数人から親グループの活動時間の延長を望む意見はあったが、中味が詰め込み過ぎであるという問題点の指摘はなかった。それは、プレワークショップを重ねることで、三者関係における一者としての"物"の内容や導入の仕方が、それにかかわる自己やメンバーにとって「適切で、魅力的な物」となるように十分な検討がなされた結果であると考えられる。

明確な学習課題が存在する課題状況にグループ活動を組み込んだ枠組みのこのワークショップについて、多くの参加者（自己）が楽しさを感じ、人とのかわり合いから得られる意欲や学びを深めながら課題に取り組むことで、学びや自覚や未来指向性が促進されたことをアンケートやワークシートに記述している事実において、このワークショップの枠組みである基盤としての三者関係的かわり構造の特性と効果を見ることができよう。

② ワorkshopにおける学びの特性

先に述べた①と重なる部分が含まれるが、参加した親の自己における学びの成立の仕方（学び方）に焦点をおいて述べる。

<自己関係>

メンバーが積極的に活動へ参加できるようにするためには、活動状況への安心感がメンバーに成立していることが必要である。このワークショップでは、パブリックな施設が会場になっていること、お母さんボランティアのサポーターがスタッフチームになっている母子同室制の活動状況であること、同じような子育て中の親子が参加者であること等の枠組みによって、育児期にある親がメンバーとして心地よく安心して積極的に活動へ参加しやすい状況が成立しており、親の学びを支えるための基本的な学習環境づくりへの配慮が整っていたといえよう。

また、ひとりのメンバーの発言に対して、それとは異なるようなポジティブな視点からとらえた自己の意見を順番に伝えるという課題場面では、メンバーみんなで多少の難しさが伴う課題に苦労しながら取り組むことで緊張感や連帯感が生まれ、“意識的に自己のものごとをとらえる視点を移動させてみる”という日常では出会わないような課題をみんなでこなすことで、グループとしての達成感も味わっているようすが観察された。

順番に、課題に即して自分の考えを言葉で相手に伝える役割を担うことは、一種のロールプレイであり、メンバーや時にはスタッフの援助に助けられながらもその課題にわいわいと話し合いながら全員で取り組む活動は、緊張感と楽しさが共存する実体験型の学びとなっていた。それは座学だけでは得られにくいようなインパクトと充実感のある学びとなり、それを活動後の日常生活に継続的に活かそうとする実践意欲をもたらしやすいことが、アンケート結果にも示されていた。

<対人関係>

現代の子育ての困難さを実際に体験した子育ての先輩ボランティアであるスタッフチームによる暖かい親へのサポートがあり、安心して参加できる学習環境の整ったこのグループ活動では、同じような育兒期にある、それぞれの個性をもつメンバーと交流でき、そこで成立する多様な関係通路における対人関係を媒介とした自己関係、課題関係の豊かな発展が促進されていた。

このワークショップでは、ワークシートに記述する自己活動の後には必ずシェアリングの活動を設定しているが、その理由はシェアリングがもたらす対人関係を媒介とした自己関係や課題関係の発展による各人の学びを大切にしているからである。個人でワークシートに記述する自己活動の後に、必ず各自が自分の記述内容（全部の内容でなくてもよい）をグループメンバーに発表し合うシェアリングによって、メンバー個々の意見・感想・発見をグループで共有し、それらはグループで共通課題に取り組む実体験によって得られた集団活動の成果として意識され、そこには人とかかわり合うぬくもりと共に深められた多くの学びが成立するのである。

2回行なわれたシェアリングでは自己に成立した体験を意識化すると同時に、他者に成立した体験について知ることによって自己の体験を振り返ったり、他者の感じ方、考え方の多様性に触れて、自己の感じ方や考え方の幅が広がるような多くの学びにつながる体験の成立がねらわれていた。

これまでの、子育てサロンの実践の積み重ねからも、集団活動における“今、ここで”の体験についてのシェアリングは活字や電子影像を媒体とせず、目の前にいる子育て仲間との共通の実体験について肉声によって話し合い、分かち合う活動であり、それは、メンバーをエンパワーし、学びも促進する大きな働きをする活動であることが明らかにされており、ワークショップについてのアンケート結果からもその効果が明示されている。

また、シェアリング以外のグループ活動場面でも、いろいろな自分と異なる意見の人と出会い、共に活動することにより、共通点や相違点を相互に発見できる体験をすることにより、他者の多様な考え方の中に成立する共通性を把握したり、子育ての正解は必

ずしも一つではないという広い視野に立てるような多面的な思考が育つための学びにつながる実体験がなされているはずである。

ともかく、これらの事実からは、関係的な存在である人間において、身近な人と人とのふれあい、つながり合い、助け合いなどの対人関係の発展を媒介にした活動の発展がもたらす、人の成長や学びへの意欲を促進する力の大きさが明確になった。

さらに、スタッフとメンバーとの対人関係がもたらすメンバーの学びを促進する働きの特性についても触れたい。自分たちと同じような育児期の苦労を経験した先輩母親がボランティアとして子育てサロンやワークショップのスタッフとして存在することがメンバーにもたらす影響は大きく、アンケートには、スタッフが暖かく親子を迎え、活動しやすいようにきめ細かな配慮をしてくれることへの喜びと感謝が多く書かれていた。少し先輩のスタッフがいきいきと活躍している姿に接することで、スタッフを自分の身近なロールモデルとして意識したり、子育てに埋没している自分も「スタッフのような立場になれるのだ」と自分の数年先の未来像をイメージしてみる機会を得ることもできるのである。そして、専門家ではないスタッフによる、親の主体的な気づきや選択を大切にすかかわり方に接することで、スタッフに心を開いて気楽に質問したり、スタッフの話からも素直に自己の気づきや学びを増やしていきやすくなるメンバーも少なくなかったはずである。

<対物関係>

このワークショップには、ワークシートに記述する活動が導入されており、それを媒介として参加者の自己関係、対人関係の発展が促進される活動の枠組みにも、大きな特性を把握することができる。

課題に即してワークシートに記述する自己活動は、自己の気づきや考えを意識化し、文章化する活動であり、その内容は、だだの自由なおしゃべりとは異なった自己の意識や認識の確立が要求され、それを深化させる活動になっている。このような自己活動が成立した後に、グループでの話し合いによる集団活動へ移行することは、各人が余裕を持って発言しやすく、話し合いのスタートをスムーズにできるので、限られた短い時間内でのグループによる課題の掘り下げを可能にしていた。

目に見えて存在する物であるワークシートは自宅へ持ち帰ることができ、それを常に目に付きやすいところに貼ることによって、活動後も、シートへの記述内容を日常生活へ継続して生かそうという意欲が持続することを助ける機能を有することは、数人へのワークショップ後の参加者へのインタビューでも確認されている。

また、各自でシート上の空白の記述部分に我が子への思いを表す短文を書き込むシンプルな課題に全員が共通に取り組んだり、その文章を順に発表したり、感想を言うシェアリング等の活動では、フリートークのような発散型の活動とは異なる緊張感が必要とされるが、このような活動枠があることで、かえって、メンバーには各人各様の感性や個性が際だつて表現される実体験がグループにもたらされるよさもとらえられた。それらの体験によって、他者の個性やユーモア感覚、多面的な視点からの文章表現等についての刺激のある学びを得たメンバーも多いことであろう。

また、親グループの活動空間の設定法から得られる学びの特性としては、育兒期にある親がだれでも参加できるような学習環境を設定するという主催者側のポリシーが表現された設定法であることがメンバーに伝わり、そこで出会えたメンバー同士に安心感と活動参加と学びへの意欲をもたらしていた。

子どもが遊んでいる空間と隣接して設定され、床に敷いた敷物の上に車座になって座り、メンバーは車座を小さく分化させたりしながら、場面に応じた柔軟な空間利用をしていた。このような椅子を必要としない設備的にシンプルなセッティングでは、妊娠中の人や乳児も連れて参加する人がいて、それをさりげなくサポートするスタッフやメンバーがいることを、ごく自然なこととして受け入れながら、温かい雰囲気のある課題状況が、混乱することなく展開できていた。

以上のように、集団に即した適切な内容や構造であるならば課題や空間利用における活動を規定する枠（物的な存在）があることで、かえってメンバーの自己が明確化したり、対人理解が深まるような学びの発展が促進されることが明らかになった。

IV. 総括的考察

子育ての当事者が、地域の中で子育ての課題を共有することから始まった子育てネットワークの活動が、育兒期の親と子が地域の中で集い学ぶ子育てサロンを生み出し、専門家や研究者との出会いを通じて、子どもの個性を発見し感性豊かな子育てを促すワークショップを開発するに至った。この一連の取り組みを「育兒期にある親の学びの場の創造」という視点で考察してきた本稿だが、子育ての当事者が、地域へ、社会へとその世界を広げていくことによって引き起こされるダイナミズムは、次世代育成という子育て支援の新たな時代に、地域の子育て風景を変える大きな可能性を備えていることを発見した。平成14年に国立女性教育会館が全国の自治体に対して行った「子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供のあり方に関する調査」によると、子育てネットワーク等子育て支援団体は全国1,567団体に上っている。これらの活動が様々な分野の専門家や研究者と有機的につながり豊かに展開することで、子育ての豊かさを実感できる社会をつくる大きな力になることは確かであろう。新座における子育てネットワークの事例を通し、全国で取組まれている当事者を核とした子育て支援活動のいっそうの発展に、本稿が資すれば幸いである。

V. あとがき

本研究をまとめるにあたり、共に開発・実践活動を担った田所裕子さんをはじめとするワークショップ開発チームの皆さん、そしてワークショップにメンバーとして参加された親子の皆さんに心より感謝の意を表します。

注)

¹ 新座子育てネットワーク

埼玉県新座市で1999年9月に社会教育施設で誕生した、子育て中の家族を結び、子育て

支援者、行政、専門機関、研究者らをつなぐ、子育ての当事者が中心となったネットワーク。発足以来、公民館・コミセン・児童センターなどで、子育てサロンをはじめ子育て中の親子の交流や若葉マークの親のための学習講座、運動会、フェスティバル、子育てサークル支援、子育て通信の発行などに取り組み、保健センターの育児学級への協力や教育委員会・子育て支援課などとの協働事業も展開している。活動は、地域の母親らによる無償または微償ボランティアの子育てサポーターによって担われ、あらゆる事業が子育て中の地域の親子に開放されている。http://homepage2.nifty.com/niiza_net/

2 子育てサークルサミット

平成 11 年 5 月、新座市立西堀新堀コミュニティセンターの事業として 3 回の連続講座として開催。事業の企画には子育てサークル関係者の提案があった。

3 ドロップ・イン

故・小出まみ氏らによるカナダの子育て支援の調査研究により日本に広く紹介された、カナダの子育て支援センターの呼称。

4 つどいの広場

平成 14 年度、厚生労働省が創設した事業で、その趣旨は「主に乳幼児（0～3 歳）をもつ子育て中の親が気軽に集い、打ち解けた雰囲気の中で語り合うことで、精神的な安心感をもたらし、問題解決への糸口となる機会を提供することが必要であることから、その機能を有する『つどいの広場』事業を新たに創設するものである」と記されている。平成 14 年度は全国 60 ヶ所、平成 15 年度は 85 ヶ所実施のための予算措置が行われている。

5 今後の家庭教育支援の充実についての懇談会

文部科学省生涯学習政策局により平成 13 年 9 月に設置された懇談会。子どもの問題の背景にある家庭の教育力の低下を食い止め、支援のあり方を検討するため 15 年 3 月まで設けられ、「『社会の宝』として子どもを育てよう！」と題した報告書が平成 14 年 7 月まとめられた。終了時の委員は、座長：大日向雅巳（恵泉女学園大学教授）、大下勝巳（おやじの会「いたか」世話人）、門川大作（京都市教育委員会教育長）、北村節子（読売新聞社調査研究本部主任研究員）、河野真理子（キャリアネットワーク代表取締役社長）、兒玉夏子（品川区立平塚幼稚園長）、坂本純子（新座子育てネットワーク代表）、嶋崎悦子（横浜市 PTA 連絡協議会会長）、盛永善之（日本青年会議所常任理事）、宮崎次郎（公文教育研究会教育主幹）。河合隼雄氏は文化庁長官就任に伴い辞任。

6 関係理論（創始者 松村康平）における原理の 1 つであり、人間関係を三者関係的（間関係的）に把握する認識および技法が人間関係の変革・発展をもたらすのにきわめて有効であるという理論。

参考文献

- 1) 今後の家庭教育支援の充実についての懇談会『『社会の宝』として子どもを育てよう！（報告）』文部科学省，2002年
- 2) 鈴木真理「生涯学習と社会教育」学文社，2003年
- 3) 中野民夫「ワークショップ」岩波書店，2001年
- 4) ジェンダー・プロジェクト 2002制作、発行「ワークショップ・マニュアル『子育てセンスを磨こう！—個性、再発見』」2003年
- 5) 松村康平、齊藤緑編・著「人間関係学」関係学研究所 1991年
- 6) 関係学会編「関係学ハンドブック」関係学研究所 1994年
- 7) 「子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供のあり方に関する調査研究報告（概要）」独立行政法人国立女性教育会館，2003年